MAKE THE PROMISE

□Vandire（ヴァンディーア）大陸——Timle（タイミル）王国　一二月二五日、Qualdere（カルデア）の街

人々の声。人々の歌声。笑う者、叫ぶ者……。街は、必要以上ににぎやかだ。一二月二五日。この日は、全世界の住人が、自分達のこの世界を守るために手を取り合った日である。

肌の白い者、黒い者、目の青い者、黒い者、角のある者、ない者……。種族を超え、善と、悪さえもその隔たりを捨て、手を組んだ。今日は、そんな日だ。

この祭りは、世界全土で、同じ日に、同じ時、例外なく行われる。そして、この世界を救った、八人の英雄達を誉め讃える。多くの吟遊詩人達が、彼らの詩を歌いあげる。歴史が繰り返される事のないように、過去を忘れる事がないように……。

この日だけは、地上に悲しみはない。

そんな、活気ある酒場の中に、一人の黒髪の女がいた。西洋系の人間が多いこの地方で、このような黒一色の髪を持つ者は珍しい。しかも、その妖しいほどの黒色は、ブロンドに勝とも劣らない見事なものだ。誰とも話さず、またその表情に喜びも感じられぬこの女は、にぎやかな辺りをヨソに、一人、酒をのんでいた。誰も、彼女に話しかける者も、またともに杯をかかげる者もない。

彼女は、灰色のローブに身をつつみ、自分の表情を半分を、その影に隠していた。その彼女の出で立ちが、ますます人をよせつけないのであろう。また、彼女の肩口の辺りから、ローブを盛り上げる長い剣も気にかかる。何故、この様な平和を祝う祭りに、武器を背負うのか……。

女の後ろでは、英雄達の名前が叫ばれ、カップやジョッキを打ちならし、拍手の音がこだましていた。笑い声、叫び声、どれも真にこの日を祝い、また祭りを楽しんでいる。

女は、酒を一瓶空けてしまうと、コップをカウンターの上に静かに置いた。そして、ゆっくりと立ち上がり、この祭りの風景を見渡しながら、懐から酒代を出してカウンターのコップのとなりに置く。

「ありがとうございっ！！」

上機嫌の店の主人が、元気良く挨拶すると、金をとり、空になったコップと酒瓶を下げる。女は、その間に、酒場から出ていった。彼女が間接を動かすたびに、金属のこすれるような、きしむような音が響いた。

酒場の主人は、ふと不思議そうにその後ろ姿を見送っていたが、次の瞬間、祭り気分に戻ってしまったのは、言うまでもない事だ。

黒髪の女は、その長く妖しい髪を揺らしながら街の中へ消えていく……。

彼女が通った道も、人々でいっぱいだった。

□Seil（セイル）湖のほとり

湖の見える森に囲まれた小さな家に、彼女の家はあった。

街から戻ってきた彼女は、薄暗い自室に入ると、着ていたローブを脱いだ。ハラリと滑るように、ローブは地面に落ちる。彼女の足元から、ファサッとホコリが立つ。

ローブの下には、白銀の鎧があった。

彼女のその恰好は、白銀の戦士……騎士そのものだった。

腰には、一本のロング・ソードとショート・ソード。わき腹に、ショート・ソード。耳元、足、胸にはダガー。そして、彼女の肩には、二メートルを超えるトゥハンデット・ソードが掛けられていた。

彼女の鎧には、自然神、*Farnuw Ezzuell*（ファウ＝エッェル）の紋章が彫られている。かつて、この世界の自然と生き物達を司っていた女神、ファウ＝エッェル。最早、その神はいない。

彼女は、ゆっくりと鎧の止め金を外した。

ゴッ……！！

鎧と、そして多くの武器が、音を立てて崩れ落ちる。

彼女の表情は、極めて、虚ろだ。

彼女の足元には、金属の山ができる。

彼女は、胸にあったダガーを抜くと、そのまま服を引き裂いた。ピッと勢いよく布が裂かれたかと思うと、バサバサと、下に転がる金属の上に乗る。

虚ろなまま、彼女は口を開く。

そして、*earlin* と、彼女は発音した。

裸体のまま、彼女はベッドに倒れ込む。

カーテンで日光を遮られたこの薄暗い部屋の床には、彼女のボディ・ラインを黒く映していた。しかし、その身体には、二本の角と、コウモリの翼のようなモノが、あった。

Marsha Whill Hwelouseadt.（マーシャ・ウィル・フェルゼズド）

この、魔族の女のフル・ネームである。

九人目の英雄……。名のない英雄。

彼女を知っている者は、彼女のことを、そう呼ぶ。

＊　＊　＊

テーブルの上の酒瓶を右手にとる。

左手に持たれたグラスに、瓶の口を近付ける。

そして、ゆっくりとグラスの中へ、そそぎ込む。

ひんやりとした感覚が、左掌から、心臓に向かって徐々に伝わってくるのが解る。そして、自分にも、体温があることに気付く。

暖かい手を持った自分がいることに気付く。

それから、グラスを口元へ持っていく。

アルコールと葡萄の匂いが、ほのかに香ってくる。

ゆっくりと、グラスを傾けた。

口の中へ、冷たいモノが広がってゆく。

気持ちいい。

マーシャは、目を閉じた。

あの戦いが、鮮明に甦ってくる。

黒雲。鮮血。炎。熱気。死。そして、音。

血染めになった女神ファウ＝エッェルを抱きかかえる自分。

ゆっくりと、自分の大剣を女神の身体から引き抜く。

その後ろを駆け抜ける、八人の戦士達。

彼らは、閃光と、轟音の中へ消えてゆく。

薄笑みを浮かべる、桃髪の女性。

崩れ落ちる、城。
霧化し、霧散していく、女神の身体。
足元に広がる、無数の死体。
群がる、死人ども。
そして、天が墜ちる。
砕け散る瓦礫とともに、わが身も、宙に投げ出された。
鎧が砕け、指輪が割れ……。
その時には、視界は真っ赤に染まっていた。
血にまみれた視界は、次第にブラック・アウトしてゆく。
過去の歴史。真実。
だが、それを記したものは、ない。
ゆっくりと目をあけたマーシャは、グラスに二杯目の酒を注ごうとした。と、不意に、彼女の目の前で、何か白い珠が出来、一瞬閃光を発した。
彼女は、然程驚きもせず、グラスに酒を注ぐと、そのまま後ろの壁によりかかって、ことの次第を見守る。
珠は、収縮すると、消え、しばらくして、そこに、小さな人型が形成されていった。
「相変わらず、小エルフのテレポートは、遅い。」
マーシャは、鼻で笑って、そんなことを言う。
彼女の膝の上には、いつしか一人の小エルフが姿を現していた。ニッコリと笑顔を浮かべると、そのまま、マーシャの胸元へあまえる。
「それでは、ファイヤー・ボールの方が先に爆発するな……。」
こぼれそうになるグラスと瓶を、小エルフに渡すと、彼女はそう言った。エルフは、受け取ったグラスと酒瓶を、自分の後ろのテーブルの上へ置く。
「へへへ。おめでとう、九人目の英雄さん。ちゃんと、約束を守ってるんだね。」
エルフは、ニコニコ笑って、マーシャの首に抱きついた。
「有り難う、*AQURA*（アクラ）。」
マーシャも、笑顔を浮かべる。
二人は、見つめ合うと、互いにお辞儀をした。
「そっちの景気は、どうだ？」
マーシャは、立ち上がり、もう一つグラスをとりながら、小エルフ、アクラに話しかけた。
「景気？　いつも通りでしょ。」
マーシャから、その小さい両手で、グラスを受け取りながら、アクラは応える。
「*TERRA*（テラ）の方は？　ファウ＝エツェルと八人がどうなったか解ったか？」
それから、マーシャはアクラが掲げているグラスへ、薄口のワインを注いでやる。
「全然解んないって。*Valhua*（ヴァルア）さんとも、連絡とれず。たぶん、あのゲートの向こうは、ヴァルアさんが住んでいる世界らしいんだけど……。
あー、あたしも、マーシャと同じのが欲しい……。」
視線を、マーシャから自分のグラスに移して、彼女は不意に口調を変える。マーシャが、ムッとした。
「駄目だ。お前は酒に弱いからな。……去年、この家を破壊しておいて、よくその様な台詞が吐けるものだ。」
マーシャは、持っていたワインを、テーブルの上に置きながら、

アクラを横目でにらんだ。
「お前は、シャンパンで充分だよ。ガキ」
そう言って、中指で、アクラの鼻頭をはじく。
そして、クスッと笑った。
「フ、フンだ。小エルフは、いつまでも小さいままなの！！」
アクラは、ムスッとすると、一気にグラスの中身を自分の胃の中にぶちまけた。
ほら、これだ……。
マーシャは、アクラの飲みっぷりを見て、溜息をつきながら、そう思った。
「だいたい、私の酒は、酒造する前から注文しなければならない一番高い代物だ。欲しかったら、お前も予約してくるんだな。」
マーシャは、自分用の酒をグラスに注ぐとそう言った。
それから、ふと、窓の外を見つめる。
ガラスの向こうには、青いセイル湖が広がっている。
「ファウ＝エツェルと八人の行方は、まだ解らないか……。あのテラがこれだけ手を尽くしても、解らないなら、私たちには知る資格がないのかも知れないな。」
そして、遠い目をしてそうつぶやく。
アクラが、マーシャの顔を見上げた。
「もう、八〇〇年が過ぎた。」
そう言って、アクラへと視線を移す。
自分の前で、自分を見つめる、この緑髪の小エルフは、八〇〇年前も今も変わらない。そして、自分も。
「元凶とも音沙汰がないのか？」
眉間にしわを寄せて、マーシャはまたつぶやく。

「ヴァルアさん、この世界に転生しているみたいよ？　封印されてからは、記憶も失って、人の子として生まれているから、たぶん、マーシャにも解らないだろうって、テラ様が言ってた。」
アクラは、自分で、空になったグラスにワインを注ぐとそう言った。そして、また一気にグーッと飲み干す。
「……。見つけたら、少し懲らしめようと思ったのだが。」
指を鳴らして、マーシャは悔しがる。
「そんな卑怯な。」
呆れた顔をして、アクラがマーシャを見上げる。
「まともにやったら、こっちが殺られる。せめて、封印されている時でも狙わない限りは……。」
溜息混じりにマーシャはそう応えた。
それもそうねとばかりに、アクラも頷く。
マーシャは、持っていたグラスをテーブルの上へ置くとベッドの上に横になった。アクラが、あわてて、ベッドから飛び出す。
マーシャは、虚ろに、天井を見つめる。
アクラは、そんな彼女の表情を、上からのぞき込む。
「八〇〇年かあ。あの戦いから、八〇〇年。自然神がいなくなってから八〇〇年。そして、約束をしてから、八〇〇年……。」
アクラは、床に座り、ベッドに寄掛かってそんな事を言った。
マーシャの視線だけが、アクラの声の方へ移動する。
「約束は、ちゃんと守っているみたいですねぇ。テラ様には、そのように報告しておきます。」
アクラは、そう言って、ニカッと笑った。
ちょっと意地悪な笑みだ。
「テラめ、よけいな事を……。」

再び、天井を眺めながら、マーシャはそうつぶやいた。
「だって、マーシャはいつも一人だから。今日だって、テラ様のパーティーに来ないから、あたしがこうしてわざわざ来てあげたのに。」
アクラは、口をとがらせる。
「それが、余計なお世話だと言うのだ。」
マーシャは、天井を見つめたまま言葉を返す。
「あー、パーティー抜け出すのがどれだけ大変か知らないな？あのご馳走と酒の誘惑に打ち勝つのがどんだけ困難な事か！！」
アクラは、バンッと床を叩いて起きあがった。
「悪かった、悪かった。」
苦笑を浮かべながらも、マーシャは謝る。
「解れば、良い良い。」
アクラは、もとの笑顔に戻って、偉そうにうなずく。
それから、ベッドの上へ腰掛ける。
そして、また空になったグラスへ酒を注ぐ。
マーシャは、虚ろに、天井を見つめているだけだ。
二人は、話すのをやめた。
入ってくる光は、南側にある窓からのみ。
暗めの部屋には、グラスの音と、二人の息づかいだけが聞こえるだけだ。
鳥の声が聞こえる。
かすかな風が、窓を揺らした。
鳥が飛び立つ。
そして、永い沈黙。

＊　＊　＊

「アクラ。」
沈黙が、はじけた。
マーシャが、アクラに言葉を発したのだ。
アクラは、持っているグラスを落としそうになった。
「私には、一つだけ守っていない約束がある。」
マーシャは、天井を見つめているまま、淡々と話し出す。
アクラが、おもむろにマーシャへと視線を移す。
そして、怪訝そうな表情になった。
「それは、あの八人と交わした約束を、約束として受け取っていない事だ。」
アクラは、首をかしげる。
「約束なぞ、聞こえはいいが、要は人を束縛するものだ。どうも、そのイメージが先行してか、私は約束を約束として振る舞った事はない。」
アクラにかまわず、マーシャは話し続けた。
「まして、義務や、使命さえも感じた事がない。約束を守った事のない私にとっては、信頼だけで交わされる契約など、無に等しいからだ。」
マーシャは、ゆっくりと、アクラの方へ視線を移した。
「私の過去を知っている、お前なら解るだろう。魔族である私の価値観というものを。」
マーシャは、アクラの目を見た。
アクラの背中に悪寒が走る。
考えてみれば、マーシャは、魔族の頂点に立つ者。彼女が本気

でその力をふるえば、アクラなど足元にも及ばない。今、ファウ＝エツェルのあとを継いだテラさえも、震撼させる力を持っているのだ。

アクラは、そのマーシャの牙が、今一瞬自分に向けられたような、そんな錯覚に陥った。

身体が動かない。声も出せない。ヘビに睨まれたカエルのようだとアクラは思った。

「私は、ただの復讐者でしかない。」

マーシャは、アクラの事などおかまい無しに、言葉を付け加えた。

そういえば、マーシャは自らの父を殺害し、全てのデーモンを敵に回したことをアクラは思い出した。裏切りと、殺戮と、復讐と。それが、マーシャの過去だった。

「じゃ、何故マーシャは約束を守り続けられるの？」

アクラは、やっと開いた口で、そう訊ねた。

「それは、私やお前が呼吸する事と同じ事だからだと、私は思う。なんて言おうか……そう、当たり前だ。当たり前のように……。それを果たす事が当たり前だと感じる事が出来たから……だと、思う。」

最後に、自信なさそうに、マーシャの言葉はつぶやきへと変わっていた。

「だから、それを約束だと認識してしまうと……たぶん私は果たせなくなってしまうだろう。」

また、ゆっくりと天井へ視線を移す。

アクラは、ホッと一息つくと、マーシャの上に上半身をまかせた。耳元に、マーシャの肌が当たる。

マーシャの、呼吸の音と、心臓の音が、規則正しく、耳へ伝わる。自分のに較べて、そのリズムは、ゆっくりだ。

「いいんじゃないんですか？　約束を守っている事に変わりはないんだから。マーシャの考えが他の人と違うってことで。」

どう応えていいのか解らないアクラは、とりあえず感想を述べてみた。

「だいたい約束なんてモノは、人の都合を人に押し付けているようなモンでしょ。勝手の産物なんですよ。あんまり深く考えると、しわが増えるよ～。あたしより年寄りなんだから。」

アクラは、クスクス笑って、マーシャの腹を指でなぞった。

マーシャは、緊張感を削がれ、脱力すると、アクラの頭を軽く小突く。

「あいた！」

一瞬、二人の動作が止まる。

一瞬、二人の視線が合う。

そして、二人は、声に出して、笑う。

「都合か。私のやっている事は、他人の都合なのか。約束自体、そういうものなのか……。やはり、約束と認識するのは良くないようだ。ますます、守らなくなってしまう。」

マーシャは、苦笑いを浮かべた。

「マーシャこそ、都合を押し付ける事しかしないクセに。」

何を偉そうに、とアクラはぼざく。

「で、随分と『約束』というモノに踊らされたみたいだけど……。これからも、その当たり前の事をやるの？」

アクラは、人を小馬鹿にしたように……。

「最早、私のいきる理由の一つとなってしまったから……やらざ

るを得ない。」
マーシャは、そう答えた。
「よろしい……なんちゃって、あたしはテラ様じゃないけど。」
アクラは、下をペロッと出す。
マーシャは、フンと口をとがらせた。
「さ、じゃあ今日は朝まで飲み明かしましょう。こんな真面目な話題は、もういい加減にしてさ。」
そう言って、テーブルにおいてあるマーシャのグラスをとると、彼女の酒を注いで、マーシャに差し出した。もちろん、その酒はちゃっかり、自分のグラスにも入れている。
「あ、こら！」
マーシャが、あわてて起きあがる。
アクラが、ケタケタ笑う。
「形あるモノは、いつかなくなるのですよ～。」
笑いながら、アクラは、そんな事を言う。
何を悟ったように……コイツめ。
マーシャは、半分怒って、半分呆れて、溜息をつく。
アクラは、既に二杯目に入ろうとしている。
もう止める気にもなれん。
「しようがない。もう一瓶、開けるとしよう。」
マーシャはそうつぶやいた。
「ごっめーん。」
本当に、すまないと思っているのか、それともただ成り行き上そのように言っただけなのか解らないが、アクラは、そんな言葉をもらしていた。
「ところで、お前はパーティーの方に戻らなくていいのか？　テラが心配するぞ。」
マーシャは、ベッドから起きあがりながら、アクラの方を向いた。
「*LENA*（レナ）が、なんとかしてくれるでしょ。それとも何、これから一緒に行く？　マーシャに行く気があれば、戻ってもいいけど。」
アクラは、ベッドに寝そべったままマーシャを見上げる。
「いや、いい。私があそこへ行くと、テラに迷惑がかかるからな。こんな魔族が一緒にいては、おいしい料理が不味くなってしまうだろうよ。」
マーシャは、少し悲しそうな表情になった。
「気にする事ないのに。英雄が、堂々としてなくちゃ駄目だよ。」
慰めるように、アクラは言う。
「私は、英雄の中に数えられていない。それに、たとえ八〇〇年前の猛者だとは言え、魔族に対する目は厳しいさ。」
ふうと、溜息が聞こえる。
「テラ様は、そんな事ないよお。」
アクラが、首を横に振ってみせた。
「いや、テラはともかく、そのとりまきがね。頭の堅い奴ばかりで困る。彼らこそが、本当は一番危険だと思うのだが……。」
マーシャは、腕組む。
「もし、もしも、また同じ様な事がおきても、マーシャはまた戦ってくれる？　自分のためにじゃなくて、ええと……。」
アクラは、いきなり何を不安に思ったのか、オドオドしながら、そんな事を訊ねた。

「私は、テラのアベンジャーだ。彼女に従うよ。」
マーシャはそういうと、アクラの頬にキスをした。
アクラに、安堵の表情が見える。
「新しい酒を、倉庫から持ってこよう。」
マーシャは、そういうと、シーツを羽織る。
立ち上がった、マーシャの身長はあまり高くなかった。一見、誰が見ても、一撃で倒れていまいそうな、華奢な、小さな女性だった。
その小さな女性は、自分の身体に長すぎるシーツを引きずりながらも、部屋の出入口へと、静かに歩く。
「アクラ……。」
部屋を出て行こうとドアのノブに手をかけた彼女は、不意にアクラの名を呼んだ。アクラが、顔を上げて、マーシャの方へ集中する。

「毎年、つきあってくれて、有り難うよ。」
マーシャは、ドアの方を向いたまま、そっけなくそういうと、静かに部屋をあとにした。
「エヘヘ、どういたしまして。」
足音だけが聞こえる、ドアの向こうに向かって、アクラはそう言葉を投げかけた。
アクラは、マーシャの照れ顔を予想しながら、クスクスと笑う。
そして、一息ついて、また、グラスへと、酒を注いでいる。
この家が明日まで存在できるかどうか、保証はない。
セイル湖の北のほとりにある小さな家に、明かりがともった。
辺りは、暗くなり始めていた。
あの、青かった空も湖面も、黒へと変わってゆく。
そして、空にも湖面にも、星達が一斉に、咲き始める。

fade out...